

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 7 日現在

機関番号：47308

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：22830128

研究課題名（和文） 所属集団の心理社会的資源としての機能についての多角的検討

研究課題名（英文） A multifaceted approach to in-group identity as a psychosocial resource

研究代表者

中島 健一郎 (NAKASHIMA KEN' ICHIRO)

長崎女子短期大学・幼児教育学科・講師

研究者番号：20587480

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、所属集団に対するアイデンティティがどのようにして心理社会的資源として機能するか多角的に検討することである。この目的の下、以下に示す3つの研究を実施した。具体的には、集団アイデンティティの高さが個人の適応に及ぼす影響についての調査的検討(研究1)、自尊心脅威事態において生じる集団アイデンティティの変動メカニズムについての調査的検討(研究2)、そして社会的排斥による心理的痛みに対する集団アイデンティティの調整効果についての実験的検討(研究3)を実施した。

研究成果の概要（英文）：We conducted three studies from multifaceted perspectives to investigate whether in-group identity functions as a psychosocial resource. The first study examined the relationship between in-group identity and positive mental health. Results suggested that the relationship between high social values, depression and fewer perceived stressful events was mediated by high in-group identification, which in turn led to expectations about support from the in-group, but not from the out-group. The second study investigated how a threat to the self-esteem of independent and interdependent individuals influenced their in-group identity. The results suggested that independent people reporting more threats to their self-esteem, identified with the in-group when it had a high social value. The third study demonstrated that identifying with the present reference in-group intensified psychological pain of future-life exclusion.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,240,000円	372,000円	1,612,000円
2012年度	1,110,000円	333,000円	1,443,000円
年度			
年度			
年度			
総計	2,350,000円	705,000円	3,055,000円

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：社会的排斥, 自尊心脅威, 集団アイデンティティ, 心理社会的資源

1. 研究開始当初の背景

他者から排斥は、被排斥者に心理的痛みを生じさせる(e.g., Eisenberger et al., 2003)。このとき、彼ら彼女らは自己調整に失敗する、

攻撃性を高める、あるいは他者との接触を避けるといった様々な不適応反応を示す傾向にある(e.g., Smart Richman & Leary, 2009)。心理社会的資源は次の2つの機能を持つがゆ

えに、これらの反応を抑制する(e.g., Taylor et al., 2008)。ひとつは、排斥自体のインパクト評価を低め、排斥による心理的痛みが過度に知覚されることを防ぐ機能である(Schnall et al., 2008)。もうひとつは、その痛みを適切に制御し、適応的対処を促す機能である(Yanagisawa et al., 2011)。

これらの先行研究では、心理社会的資源を個人的資源(e.g., 自尊心・楽観性・幸福感)、あるいは対人的資源(e.g., サポート源としての友人・知人)といった個人・対人レベルのものとして捉えている。しかしながら、人が進化の過程で集団生活を選好するようになったこと、そして人の基本的欲求のひとつに所属欲求があり、内集団の存在がその充足を促すこと(e.g., Baumeister & Leary, 1995; Williams, 2007)を考慮すれば、現在所属している集団の一員としての意識、すなわち集団アイデンティティが、集団レベルの心理社会的資源として機能することが想定される。実際、所属集団への認知的近接性が社会的排斥による心理的痛みを緩和することが示されている(Knowles & Gardner, 2008)。そこで、本研究では以下に示す3つの研究を通して、集団アイデンティティの心理社会的資源の機能について多角的に検討することにした。

2. 研究の目的

本研究では、内集団を研究参加者の所属学部とした上で、以下の3点を主目的とした検討を実施した。なお、以下の(1)等の表記は、3. 研究の方法や4. 研究成果の(1)等の表記と対応している。

(1) 集団アイデンティティが個々人の精神的健康に及ぼす影響の解明

集団アイデンティティが心理社会的資源として機能することを仮定した場合、集団アイデンティティの高さが、排斥等の自尊心脅威事態のインパクト評価を低め、自尊心脅威に伴う心理的ディストレスが過度に知覚されることを防ぐ。さらに、それを適切に制御する結果として、個々人の精神的健康が良い状態に保たれるだろう。つまり、集団アイデンティティの高い個人ほど、知覚された自尊心脅威事態の頻度が少なく、かつ抑うつ傾向も低いことが予測される。この点について検討するために、研究1では大学生を対象とした横断調査を実施した。なお、研究1では所属学部に付与された社会的価値(i.e., 内集団の優越性; 磯部他, 2005)の影響について併せて検討した。

(2) 自尊心脅威事態における集団アイデンティティの変動メカニズムの解明

上述したように、所属集団への認知的近接性が排斥に伴う心理的痛みを緩和することが示されている(Knowles & Gardner, 2008)。この知見に加えて、社会的排斥が自尊心脅威

事態を引き起こす対人関連ストレスフルイベントのひとつであること(e.g., Lazarus & Folkman, 1984; Williams, 2009)を考慮すれば、自尊心脅威に晒された個人は集団アイデンティティを高めることを通して、その脅威を緩和する可能性がある。この点に関して、先行研究では、相互独立的自己観、すなわち自身を独立的で他者とは異なったものと捉える個人に着目した場合、対人関連ストレスフルイベントや課題関連ストレスフルイベントを多く経験するにつれて所属集団へのアイデンティティを高めることが明らかにされている(e.g., 中島, 2010; Nakashima et al., 2008)。これは、相互独立的自己観を有する個人にとって、集団アイデンティティの高まりが、自尊心脅威事態に適切に対応するための一助となることを示唆している。

しかしながら、現実集団が集団間文脈や社会の枠組みの中で捉えられることを考慮した場合、この過程がすべての集団において生じるとは限らない。なぜなら、集団アイデンティティの高まりが自尊心脅威を緩和するのは、その集団に高い価値が付与されている場合に限定されるためである。仮に、価値の低い集団へのアイデンティティを高めた場合、それは自己価値の高まりではなく、その毀損を招く可能性がある(see Hogg & Abrams, 1990; Tajfel & Turner, 1979)。これらについて検討のために、研究2では大学生を対象とする横断調査を実施した。

(3) future-life exclusion 操作による心理的痛みに対する集団アイデンティティの調整効果の解明

先行研究では、集団アイデンティティの高さが過去の排斥を想起することに伴う心理的痛み、あるいは実際に他者から拒絶されたときに生じる心理的痛みを緩和することが示されている。例えば、所属集団へのアイデンティティが高い個人は、過去の排斥経験の想起を厭わない(中島他, 2010)。これは、集団アイデンティティの高さが排斥のインパクト評価を抑える可能性を示唆している。

また、上述した Knowles and Gardner (2008)では、所属集団への認知的近接性が排斥経験の想起に伴う心理的痛みだけではなく、自尊心の低下も防ぐことが示されている。加えて、Paolini et al. (2010)は、他者(i.e., 外集団メンバー)から実際に拒絶のサインを示された場合に、所属集団の一員としての意識が顕現化すること、そしてそれが拒絶への対処方略であることを示唆している。これらの知見は、排斥に伴う集団アイデンティティの高まりが、排斥による心理的痛みを制御することを示唆している。

以上より、集団アイデンティティが過去の排斥経験を操作する、あるいは実際に排斥されることによって生じる心理的痛みを緩和

すると言える。

しかしながら、この点について慎重に検討すべき問題がある。それは、他の排斥操作を用いた場合に、これらの知見が追証されるか検討されていない点である。他の社会的排斥の実験操作には、future-life exclusion 操作がある。これは、パーソナリティテストの結果として、将来孤独な生活を送る可能性が高いことを伝えるものである(e.g., Baumeister et al., 2005)。研究3では、この操作を用いた実験的検討を実施し、集団アイデンティティが持つ社会的痛みの緩衝効果について検証した。

3. 研究の方法

(1) 大学生 163 名(男性 63 名, 女性 100 名)を対象とする質問紙調査を実施した。方法の詳細は日本社会心理学会第 52 回大会発表抄録集に掲載されている。

(2) 大学生 193 名(男性 80 名, 女性 113 名)を対象とする質問紙調査を実施した。方法の詳細は Nakashima et al. (2012, Asian Journal of Social Psychology)に掲載されている。

(3) 女子短期大学生 43 名を対象とする準実験的手法を用いた集団実験を実施した。一連の実験手続きは、Baumeister et al. (2005)や Berstein and Claypool (2012)に準ずる。

まず、実験参加者は集団実験の 1 週間前に集団同一視尺度(Karasawa, 1991; 13 項目)と文化的自己観尺度(高田, 2000; 20 項目)に回答した。次に、対象者を 2 つの講義室に分け、それぞれの部屋で集団実験を実施した。

第 1 セッションでは、カバーストーリーとして文化的自己観尺度がパーソナリティテストであると説明し、このテストの成績によって、将来どのような生活を送る可能性があるかが分かると参加者に伝えた。そして、以下の 3 条件を設定した。まず将来孤独な生活を送る可能性が高い future-alone 条件、次に将来人間関係に恵まれた幸せな生活を送る future-belong 条件、最後に今後事故や怪我に遭う可能性がある misfortune 条件である。参加者は、これらの条件のひとつに参加した。

第 2 セッションでは、参加者の心理的痛みを測定した(10 項目 5 件法; 柳澤, 2011)。項目例として“今、私は他者に拒まれたり、避けられたりしないか心配している”, “今、私は他者とのつながりを求めている”があげられる。さらに、参加者の接近・回避動機を測定した(4 項目 5 件法; 柳澤, 2011)。接近動機の項目例として“今、私はよい結果を上げること意識を集中している”, “今、私は自分の目標を成し遂げることを考えている”があげられる。そして、回避動機の項目例として“今、私は悪い結果を避けることに集中している”, “今、私は自分のせいで失敗するこ

とを恐れている”があげられる。なお、回避動機の高さは、自身にとってネガティブな出来事を避けることに動機づけられているかどうかを示しており、不適応反応のひとつとして考えられている(e.g., Smartrichman & Leary, 2009)。

4. 研究成果

(1) 内集団の優勢性得点と均質性得点の関連を確認したところ、両者に正の関連が認められた($r = .22, p < .05$)。そのため、目的変数を優勢性得点、説明変数を均質性得点とする回帰分析より残差得点を算出し、均質性の影響が統制された優勢性得点を抽出した(e.g., Walton & Cohen, 2007; 中島他, 2010)。

この優勢性残差得点と他の尺度得点間の 0 次相関を確認したところ、概ね想定通りの関連が確認された(Table 1)。そこで、これらの得点を用いた構造方程式モデリングによるパス解析を実施した結果、優勢性残差得点と集団同一視得点、集団同一視得点と集団メンバーからのサポート期待得点に正の関連が認められただけではなく、集団メンバーからのサポート期待得点と psychological well-being 得点に負の関連が認められた($\chi^2(9) = 6.91, ns, GFI = .987, AGFI = .969, RMSEA = .000$; Figure 1)。

以上より、内集団の社会的価値が個人への適応を促す一連の過程において、集団アイデンティティとメンバーからのサポート期待が媒介的な役割を果たすことが示された。これらは、所属集団が心理社会的資源として機能する結果として、個人の精神的健康を促すことを示唆するものであり、そのメカニズムを明らかにした貴重な知見である。

Table 1. 各尺度の基礎統計と単相関分析の結果

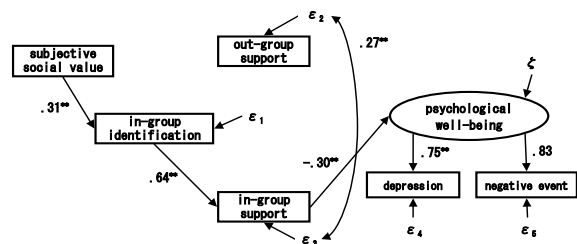


Figure 1. 内集団の優勢性が個人の well-being を導く過程に関するパス解析の結果 ** $p < .01$

(2) 調査対象者が複数の異なる学部所属していることが確認されたため、まず研究 1

と同様の手法を用いて学部ごとの優勢性残差得点を算出した。分析対象となった4学部のうち最も人数の多いA学部(n=117)の優勢性が最も高く、以下B学部(n=13)、C学部(n=41)、D学部(n=22)と続いた。学部別の調査対象者の人数を考慮し、A学部を社会的価値高学部(M=.26)、それ以外の3学部を社会的価値低学部(M=-.40)とした。

相互独立的自己観を有する個人(n = 96)を対象に構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を実施した結果、以下に示す結果が得られた($\chi^2(8) = 6.27$, ns, GFI = .975, AGFI = .906, RMSEA = .000)。

社会的価値高学部に着目した場合、相互独立的自己観を有する個人は、自尊心脅威を感じるにつれて内集団を common identity group として捉える傾向を強める。その結果、集団同一視が高まることが示された(Figure 2)。ここで、common identity group とは、内集団がウチとソトを区別する枠組みとして機能し、その特徴が外集団との関係や差異によって決定される集団のことを指す(Prentice et al., 1994)。この点を考慮すれば、社会的価値高学部に所属する相互独立的自己観を有する個人は、集団間文脈における内集団と自己の優位性の観点から自尊心脅威を緩和しようとする傾向にあることが示唆される。

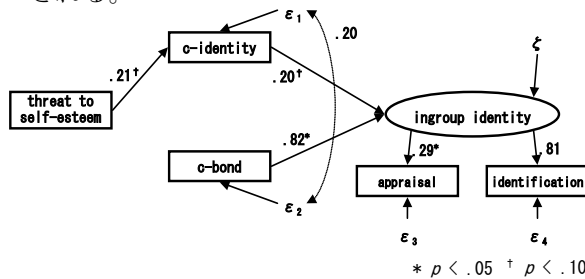


Figure 2. Path model for independents in the high social-value group ($n = 58$).

一方、社会的価値低学部に着目した場合、自尊心脅威に伴って内集団を common identity group として捉える傾向を強める結果として、集団アイデンティティが低まることを示された(Figure 3)。これは、社会的価値低学部に所属する相互独立的自己観を有する個人の場合、自尊心脅威事態におかれることによって集団間文脈における内集団と自己の劣位性を再認識する。その結果、さらなる自己価値の毀損を防ぐために、学部集団へのアイデンティティを低めることが示唆される。

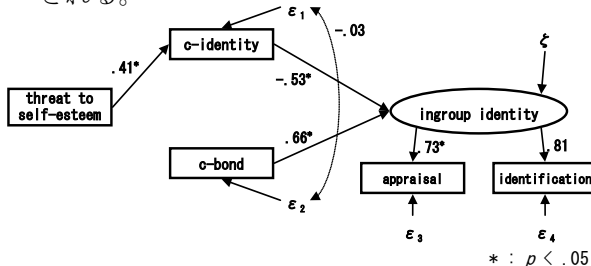


Figure 3. Path model for independents in the low social-value group ($n = 38$).

以上より、集団アイデンティティの高まりは、とりわけ相互独立的自己観を有する個人にとっての心理社会的資源として機能する可能性がある。しかしながら、所属集団に高い価値が付与されている場合には、その機能を持たないことが実証された。所属集団の心理社会的資源としての機能の境界条件を明確にしたという点において、研究2の理論的意義は大きいと考えられる。

(3) まず、各条件における心理的痛みが所属学部に対するアイデンティティによってどのように変化するか検討するために、ステップ1に集団同一視の標準化得点、そして各条件をダミーコード化した2変数(変数1: future-alone 条件を1、それ以外を0とコード化; 変数2: misfortune 条件を1、それ以外を0とコード化)を、そしてステップ2にそれらの交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した(see Aiken & West, 1991)。分析の結果、集団同一視の主効果($B = -.22$, $t(37) = 1.95$, $p = .06$)に加えて、変数1の主効果($B = .28$, $t(37) = 1.85$, $p = .07$)が認められた。さらに、集団同一視と変数1の交互作用効果($B = .41$, $t(37) = 2.73$, $p < .05$)が認められた(Figure 4)。

これを受けて、集団同一視高群と低群ごとに各条件間の心理的痛みを比較することを目的とした単純傾斜の検定を行った結果、同一視高群(-1SD)において future-belong 条件よりも future-alone 条件における心理的痛みが強いことが示された($B = .69$, $t(37) = 3.24$, $p < .01$)。さらに、misfortune 条件よりも future-alone 条件における心理的痛みが強いことが示された($B = -.50$, $t(37) = 2.21$, $p < .058$)。一方、同一視低群(+1SD)において各条件間の心理的痛みに有意差は認められなかった。

さらに、条件別の心理的痛みに対する集団同一視の効果と比較することを目的とした単純傾斜の検定を行った結果、future-belong 条件における心理的痛みは同一視高群よりも低群において強いことが示された($B = -.22$, $t(37) = 1.95$, $p = .06$)。さらに、future-alone 条件における心理的痛みは同一視低群よりも高群において強いことが示された($B = .20$, $t(37) = 1.92$, $p = .06$)。しかしながら、misfortune 条件では、両群の心理的痛みに有意差は認められなかった。

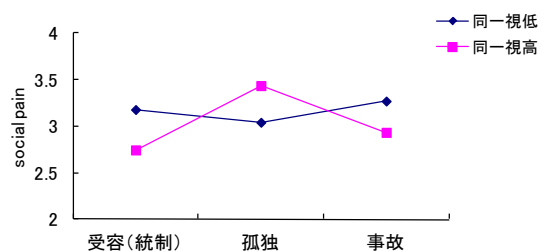


Figure 4. Social pain as a function of group identification and future-alone

次に、各条件における回避動機が所属学部に対するアイデンティティによってどのように変化するか検討するために、同様の手法に基づく階層的重回帰分析を実施した。この際、回避動機に及ぼす接近動機の影響($r(43) = .49, p < .01$)を統制するために、接近動機の標準化得点をステップ0に投入した。分析の結果、接近動機の主効果($B = .47, t(36) = 3.80, p < .01$)、集団同一視の主効果($B = -.38, t(36) = 1.76, p = .09$)、そして集団同一視と変数1の交互作用効果($B = .69, t(36) = 2.33, p < .05$)が認められた(Figure5)。

これを受けて、集団同一視高群と低群ごとに各条件間の回避動機を比較することを目的とした単純傾斜の検定を行った結果、同一視高群(-1SD)において、misfortune条件よりもfuture-belong条件における回避動機が強いことが示された($B = -.89, t(36) = 2.00, p = .05$)。一方、集団アイデンティティ低群(+1SD)において各条件間の回避動機に統計的な差異は認められなかった。

さらに、条件別の回避動機に対する集団アイデンティティの効果を比較することを目的とした単純傾斜の検定を行った結果、future-belong条件における回避動機は同一視高群よりも低群において強いことが示された($B = -.28, t(36) = 1.76, p = .09$)。しかしながら、future-alone条件やmisfortune条件では、両群における回避動機に有意差は認められなかった。

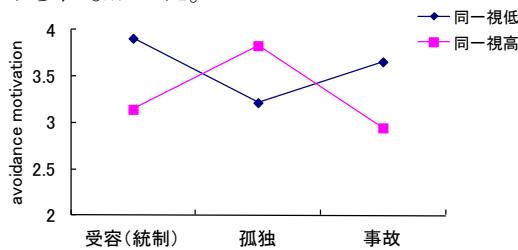


Figure 5. avoidance motivation as a function of group identification and future-alone

以上より、現在所属している集団に対するアイデンティティが高い個人ほど、将来の孤独に対して強い心理的痛みを感じ、さらに不適応反応である回避動機を強めることが明らかになった。学部集団が大学生にとっての準拠集団であり、その集団へのアイデンティティが学業成績や精神的健康に影響を及ぼすこと(Walton & Cohen, 2007; 2011)を考慮すれば、現在の所属集団から様々な恩恵を受けている個人ほど、将来の孤独に対して脆弱である可能性がある。所属集団の心理社会的資源としての機能の境界条件を明確にしたという点において、研究3の理論的意義は大きいと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① Nakashima, K., Isobe, C., & Ura, M. (2012). Ingroup representation and social value affect the use of ingroup identification for maintaining and enhancing self-evaluation. *Asian Journal of Social Psychology*, 15, 49-59. 査読有

[学会発表] (計6件)

- ① 中島健一郎・磯部智加衣・浦光博 内集団の社会的価値はどのようにして個人の適応を促すか？ 集団アイデンティティと集団メンバーからのサポート期待に着目して、日本社会心理学会第52回大会, 2011年9月18日, 名古屋大学(愛知県)
- ② 中島健一郎・古谷嘉一郎 同性友人関係における自己観の類似性と相補性に関する一考察, 日本心理学会第75回大会, 2011年9月17日, 日本大学(東京都)
- ③ 中島健一郎・柳澤邦昭・浦光博 時間的距離は誰の社会的痛みを緩和するか？ 集団アイデンティティの異なるタイプとその個人差に着目して, 日本グループ・ダイナミクス学会第58回大会, 2011年8月23日, 昭和女子大学(東京都)
- ④ 中島健一郎・磯部智加衣・浦光博 社会的排斥による関係性の維持・強化に対する文化的自己観の効果, 日本心理学会第74回大会, 2010年9月20日, 大阪大学(大阪府)
- ⑤ 中島健一郎 内集団アイデンティティの重層的な変動メカニズム, 日本社会心理学会第52回大会, 2011年9月17日, 広島大学(広島県)
- ⑥ 中島健一郎・浦光博 集団表象の変容過程：内集団の社会的価値に着目して, 日本グループ・ダイナミクス学会第57回大会, 2010年8月28日, 早稲田大学(東京都)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中島 健一郎 (Nakashima Ken'ichiro)
長崎女子短期大学・幼児教育学部・講師
研究者番号：20587480